HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	みんなきょうだい大きな家族 ： 赤ちゃんからの異年齢保育と多世代交流
Author(s)	吉田, 行男; 家村, 維人
Citation	子ども発達臨床研究, 12, 3-12
Issue Date	2019-01-31
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.12.3
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72760
Type	departmental bulletin paper
File Information	050-1882-1707-12.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

DOI: 10. 14943/rcccd. 12. 3

みんなきょうだい大きな家族

── 赤ちゃんからの異年齢保育と多世代交流 ──

吉　田　行　男[1]・家　村　維　人[2]

1．はじめに：地域異年齢子ども集団の再生

まず、異年齢保育の本題に入る前に、私の子どものころのお話を少ししたいと思います。私は敗戦から３年後に生まれまして、４人きょうだいの長男でした。一番下の弟は８歳年が離れていて、それはもう、上３人の愛情をたっぷり受けて育ちました。しつけは僕がしましたので、弟にしてみると、兄貴じゃなくておやじみたいな感じだったと思います。

その当時、路地裏には異年齢の子どもがあふれておりました。近所の小さい子と一緒に遊んだり、世話を焼いたり、それからビー玉や、パッチ（めんこ）の名人のお兄ちゃんにあこがれたり、それからガキ大将のお兄ちゃんに泣かされたりしていました。僕は、小さい時かわいい子だったもんですから、お姉ちゃんたちにはすごくかわいがられました。こんなふうにして、当時の子どもたちは地域の異年齢子ども集団の中で、人間関係とかさまざまなことを学んで、育ち合っていました。子どもというのは子どもの中で育つんですよね。

ところが今ではどうでしょう。核家族・少子化で、きょうだいは１人か２人ですよね。そして、地域の異年齢子ども集団はまったく消え去っています。こういう環境の中で、子ども・若者の自己中心性とかコミュニケーション能力の低下とか、子育て不安などの問題が生じていると思います。保育士養成校の学生でも、赤ちゃんのおむつを取り換えたり、赤ちゃんのお世話をしたりしたことがある人は、ほとんどいません。

子育て不安は当然ですよね。プレパパ・プレママ教室に行ったら、僕が話す前から目がうるうるして、もう不安でいっぱいみたいな感じなんです。なにせ最もマニュアルどおりにいかないのが子育てです。まじめなお母さんほど、子どもの虐待に走る可能性が高いと言われています。こういう現状というのは、ちょっとオーバーかもしれませんが、人類始まって以来の現象で、もう危機的な状況だと言っても過言ではないと思います。

このような中で、私たちは、異年齢保育という環境が子どもの成長・発達にとって必要不可欠なものだと確信しています。

---

[1] 発寒ひかり保育園　園長、本報告の１．～３．を担当。
[2] 発寒ひかり保育園　副主任保育士、同じく４．を担当。

2．実践・研究の概要

⑴　実践と研究の経過

発寒ひかり保育園では、「みんなきょうだい大きな家族」というテーマで、愛情に満ちた家庭的な保育の下、子どもの全人格的発達を保障しようと、長年、異年齢保育の実践・研究に取り組んできました。この 3 月で丸 20 年になります。最初は、3 歳からの定期の活動場面での異年齢交流で、その日はファミリーの日としました。

そのときに 3 歳だった、カナコちゃんが、2 年前にうちの保育士になりました。続いて、そのとき 2 歳で、次の年から異年齢交流に参加したアカリちゃんも、去年うちの保育士になりました。

その後、幼児では 2 歳から 5 歳児の、そして、3 年前からは、0 歳児（産休明け）から 5 歳児（4 月年齢）までの毎日の生活場面での異年齢グループ（ファミリー）保育を実施しています。併行して、年齢別のクラス活動も保障しています。

⑵　実践上の条件

次に実践上の条件・配慮についてです。他園や当園の経験から、私たちは、異年齢保育を実りあるものとするためには、実践上いくつかの条件があると考えています。まず 1 つ目は、うちの異年齢保育を始めるときに、あちこちの研究会に参加したり、保育園の見学に行きました。そうしましたら、初め失敗した保育園がたくさんあったんです。なぜだかお分かりでしょうか。お兄ちゃんだから、お姉ちゃんだから、下の子のお世話をするんだよ。おまけに、あなたとあなたはペアよ、なんてやっていたんです。そうすると上の子は下の子どもが大嫌いになります。皆さん、お勉強はいかがでしょうか。強制されると大嫌いになるんですね。それで、異年齢の日は嫌だ、保育園へ行かないって始まったというんですね。

そこで、うちの異年齢保育を始めるときには、絶対に強制しないようにしようね、とにかく子どもに任せようね、といって始めました。子どもの主体性を尊重する保育をしておりますと、自然に豊かなかかわりが生まれてきました。

次は、3 歳からの異年齢保育の問題性です。満 3 歳以上というとイヤイヤ期も過ぎて、だいたい身辺自立ができてきます。お世話されたくない 3 歳児を、上の子たちが寄ってたかってお世話する。それでは、異年齢保育のよさを十分引き出すというわけにはいかないのではないかなと思います。じょうずにやっていらっしゃるところもあるかと思いますけれども、私たちはその後、幼児での毎日の生活を伴にする異年齢生活グループでは、2 歳からの異年齢グループとしました。

⑶　年齢別保育との比較実証の結果

さて、研究の方ですが、最初、年齢別保育との比較実証研究をいたしました。観察結果とアンケートによる実態調査による比較実証の結果、表 1 の通り年齢別保育では、子どもと保育士との相互交渉はすごく多いんです。それから、競争的・攻撃的相互交渉が特徴的です。

それに比べ、異年齢保育では、保育士と子どもとの相互交渉は少なく、異年齢の子ども同士の協調的・

表１　年齢別保育と異年齢保育の相互交渉パターンの特徴の比較

	年齢別保育	異年齢保育
保育士と子ども	・保育士の子どもへの一方向の教育的・養護的関わりが非常に多い	・保育士と子どもの相互交渉は相対的に少ない（年上の子どもたちがそれを補完）。
異年齢間	・自由遊びや異年齢交流の場面でも（主体的な）相互交渉は、ほとんど見られない（例外：兄弟間、延長保育の子）。 ・上の子から下の子への一方向の攻撃的関わりが見られた。	・協調的・養護的相互交渉、愛着行動が非常に多く見られ、教育的相互交渉も多い（生活・遊びの伝承を中心に）。 ・競争的・攻撃的相互交渉は稀であった。
同年齢間	・協調的相互交渉が多い。 ・競争的・攻撃的相互交渉が多い。	・協調的相互交渉が多い（共同で低年齢児のお世話を含む）。 ・競争的・攻撃的相互交渉はあまり見られなかった。

表２　異年齢保育における子どもの心の発達

a．向社会性（思いやり、お世話、仲裁、生活・遊びの伝承等）
b．愛着関係（頻繁な愛着行動、兄弟・親子のような愛着関係の形成）
c．受容性（遊びを壊す年下の子を受け入れ、工夫しながら遊びを展開する等）
d．自立心（他者を尊重し、主体的・建設的に考え、行動しようとする等）

養護的・教育的相互交渉、愛着行動が大変多く見られました。また、競争的・攻撃的相互交渉はあまり見られませんでした。

⑷　異年齢保育における子どもの発達

さらに、異年齢保育によって育つ子どもの心の成長・発達として、表２のａからｄの４つに集約できることが分かりました。向社会性というのは一般的によく言われている思いやりとか、助け合いとか、お世話とかの他に、仲裁、生活・遊びの伝承等ですね。また愛着行動がどんどん出てきて、まるできょうだい・親子のような愛着関係が生まれてきます。

それから受容性ですね。小っちゃい子は壊すのが専門で、大きな子たちがつくった大作をばーっと壊します。大きい子も最初は、怒ったり、Ａちゃん、こっちへ来ないでとやっていたんですけど、小っちゃい子も一緒に遊びたいんだなと、だんだん知恵を絞って、ここはやっていいよとか、同じ場所で参加させてあげるようになってきます。

最後の自立心ですけれども。自分のことは自分でしますというような、浅い自立心では全然ありません。関係性の中で、お互いにとって、また、みんなにとってどうすることがいいのか。この難問をどうやって解決したらいいのか。善悪も含めてそういうことをちゃんと考えて行動できるという深い意味での自立心です。４～５歳ぐらいになると徐々にそういう成長結果が明らかになってきました。

3．0歳からの異年齢保育

今日のメインテーマである０歳からの異年齢保育ですが、この３月で丸３年になりました。前の２歳からの異年齢保育との比較実証の結果、相互交渉は非常に豊かになって、さらに広がりました。

これまでの研究で用いてきた相互交渉のカテゴリーで分類しますと、愛着行動、養護的相互交渉、教育的相互交渉、協調的相互交渉、どれを取っても、２歳からの異年齢保育に比べて、より事象が豊富で、より頻繁で、当然ですが関わる年齢層もより広がっております。特に０～１歳児が加わったことで、愛着行動がとにかく頻繁に出てきています。

生活場面は全部異年齢保育ですが、午前中の活動の時間帯は、主に年齢別の活動を保障しております。その他、異年齢グループで活動したり、異年齢で選択できる活動をしています。私たちは、異年齢のグループをファミリーと呼んでいまして、６つのファミリーそれぞれに、愛着行動とか養護的な相互交渉がどんどん出てきました。

⑴　具体的な姿

新しく出てきたり、前より増えた相互交渉は、表３の通りです。まず愛着行動ですと、優しい表情、声掛けを伴いながら、頭や顔や体をなでる、ほおずりする、泣く子をあやす、抱く、抱き合う、手をつなぐ等、お互いに慕い合い、信頼し合い、甘え合うなどです。心の安定をはかっている例が多いです。

それから養護的相互交渉ですが、生活全般に関する援助。食事とか場面が切り替わる時に出てくるんですね。食事等の準備、配膳。エプロンを着けたり昼食・おやつの摂取、排泄の誘導、手洗いを教える、鼻水をふく、衣服・靴等の着脱、移動の誘導、午睡を促すために背中を軽くとんとんしたり、先生たちのベビーマッサージを見習って、自然に子どもたちが小さな子にベビーマッサージをしているんですよね。その他、年下の子の見守り、年下の子も年上の子に甘えて求める、後追いまでしています。異年齢というと、よく上の子が下の子をお世話する良さが強調されますが、それだけじゃありません。下の子が上の子に甘え、そして心を安定させ、そしてお兄ちゃん、お姉ちゃんにあこがれ、何でもまねをしま

表３　新出及び増加した主な相互交渉パターン

【愛着行動】
　優しい表情・声掛けを伴いながら、頭や顔や体をなでる、頬ずりする、泣く子をあやす、抱く、抱き合う、手をつなぐ等、互いに慕い合い、信頼し合い、甘え合う（心の安定をはかっている事例が多い）。

【養護的相互交渉】
　①生活全般に関する援助＝食事等の準備（配膳、エプロン等）、昼食・おやつの摂取、排泄の誘導、手洗い、鼻水を拭く、衣服・靴等の着脱、移動の誘導、入眠を促す（背中を軽叩・マッサージなど）等、②見守り、③年下の子も年上の子に甘え、求める。
　※付記・これらは自発的なものである。
・各相互交渉は他の交渉と一体的であることが多い。
・４～５歳児ともなると、年下の子の能力・自発性を尊重しながら援助する子が増えてくる。

す。自立が早いんですよね。再度付け加えますと、それらは全部自発的なものです。また、各相互交渉も、分割できるものではなくて、ほかの交渉と一体的に行われています。それから４～５歳児になると、本当にいつも感心するんですけど、年下の子の能力・自発性を尊重しながら必要なところを援助するという子がどんどん増えてきます。

うちの給食はバイキング形式で、２歳児から自分の食べる量を考えながら小さいトングでよそうんですが、よそいづらいのが結構あるんです。そうすると、後ろで見ていた４～５歳児が、「Ｋちゃん、どのぐらい欲しいの」とか、「何個欲しいの」とか言って、そのトングの上から握って、こうやってよそってあげたりしているんですよね。保育士以上なんです。

⑵　心の発達の深化

次は心の発達の深化です。まず愛情関係の深まりと心の安定ですが、入園したばかりの０歳児とか１歳児とかが、長泣きを全然しません。初めての集団生活で、生活環境が激変ですよね。そういう子たちが、上の子たちに可愛がられ、優しくお世話されて、すぐに慣れ、心の安定を図っています。

年齢別保育との比較実証研究の結果として、先ほど表２で４つ（ａ～ｄ）の発達を挙げましたけれども、０歳からの異年齢保育では、それらがさらに深まっていますし、発達の早まりも見せています。それから、年上の子と年下の子の間に、前以上にきょうだい・親子のような愛着関係が形成されています。一例ですが、先生が抱いても泣きやまない赤ちゃんを、普段からお世話している５歳児の女の子が抱いたら、泣きやむんですよ。証拠写真があります。まるで親子みたいな関係ですよね。その、頼り頼られる関係の中で、お姉ちゃんの方も癒されています。

特に、発達や環境に問題を抱えているお子さんですね。そういう子たちの上の子が小さい子をかわいがることに喜びを感じ、小さい子は上の子にかわいがられることを喜び、そのことでお互いに本当に癒やされているんです。中には、背負いきれないほどのものを背負っているお子さんもいます。でも、そういう深い愛情関係を築く中で、悲しさとか心の傷とかを癒やしている子どもたちが少なからずおります。

次は自己肯定感です。うちでは小・中学生、高校生、大学生までずっと追跡調査をしていまして、その中で気が付いたことがあるんです。自己肯定感が高いんじゃないかと。まだ分析中なんですが、５月の保育学会には整理して発表したいと思っております[3]。

⑶　卒園生の追跡調査

それでは、卒園生の追跡調査の結果と分析について、結論のみをお伝えします。先ほどの４つの心の成長・発達は、卒園後も伸びています。それから、けんかを好まない。人間関係の調整が非常にじょうずだというか、進んでやっているということが分かりました。これらから、うちの卒園生たちの特徴として、平和的・自立的な人格傾向がうかがえるじゃないだろうかと私たちは捉えました。

---

[3] 家村維人・吉田行男（2018）異年齢保育卒園生の追跡調査．日本保育学会第 71 回大会発表論文集.

それから、なんといっても養育性が非常に高い。後でビデオ（写真）に出てきます。卒園生たちの、子どもの世話のじょうずなこと。私たちも舌を巻くほどです。次に、コミュニケーション能力も高い。これは、中高生の異年齢同窓会の懇談の中で、中学生の卒園生自身が言いました。「うちの卒園生たちはコミュニケーション能力が高い」と。ああ、そうなんだなと調査した結果、それが認められております。

4．「ファミリー」と多世代交流

⑴「ファミリー」

当園では、異年齢のグループのことを「ファミリー」と呼んでいます。写真 1 は、あるファミリーでの朝のお集まりと、室内で過ごしているときの様子です。画面右下に赤い服の男の子がいますが、「ハイ」と小さい子にクレヨンを手渡しました。彼は発達がゆっくりな子なのですが、赤ちゃんと過ごすファミリーの中では、しっかりお兄さんをしています。

写真 2 は、絵本を読み聞かせている 5 歳児です。小さい子が絵本を読みたそうにしていると、大きい子がその気持ちをくみ取って、自ら読み聞かせをする姿がよく見られています。

5 歳児たちがカード遊びをしているときに、見よう見まねで参加する 2 歳児の女の子です（写真 3）。大きい子も邪魔者扱いしないで一緒に遊んだり、教えてあげる姿が見られています。

写真 4 は、子どもたち同士で手遊びを楽しむ様子です。この後、手遊びをしますが、小さい子の好きな歌や踊りなどを一緒に楽しんでいます。異年齢で過ごしていると、こうした関わりがあちこちで自然

写真 1

写真 2

写真 3

写真 4

に見られます。ただし、先ほど園長が話しましたが、四六時中異年齢で過ごしているわけではなく、年齢による発達保障も大切にしています。さまざまな活動を取り入れていますが、それについては、また別の機会に紹介できればと思います。

ここからが本題の、養護的相互交渉の様子です。ホールで遊んだ後、お部屋に帰りたがらない赤ちゃんがいましたが、一緒に遊んでいた５歳児が連れ戻しました。その５歳児はそのままお部屋に移動して、別の子の着替えのお手伝いもします（写真５）。すぐに何でも手伝うのではなく、様子を見守って、できないところだけさりげなく手伝っています。このように、４～５歳児にもなると、子どもたちの能力に合わせた援助ができるようになっていきます。

写真６は、別の５歳児たちが小さい子をトイレに連れていく様子です。小さい子の着替えも手慣れています。さらに手洗いの仕方までしっかり教えています。その後ろでは、３歳児の女の子も１歳児のお世話をしています。ファミリーでは、こうした姿が日常的に見られます。

写真５

写真６

写真７は、食事の様子です。食事の時間も、大きい子たちは自発的にお手伝いをしています。保育士が食べさせても嫌がるのに、お兄さん、お姉さんだと喜んで食べるということもよくあります。こちらは４歳児の女の子ですが、５歳児のまねをしてご飯を食べさせています。子どもたちは、小さいときに自分がしてもらってうれしかったことをしっかりと覚えていて、大きくなってからは、今度は自分がそれをしてあげたいと思っているように感じます。こうした相互交渉の伝承が自然となされているのです。

写真７

先ほど話したように、４～５歳児にもなると、その子の様子に合わせた対応ができるようになります。

写真８では、５歳児の女の子が、お皿に残っていたおかずを集めた後に、食べさせるのではなくて、スプーンとお椀を渡して「自分で食べてごらん」と自立を促すように関わりました。

写真９は、お昼寝の様子です。大きい子は、自発的に小さい子の背中を優しくトントンしたり、さすったりして、小さい子たちが気持ち良く入眠できるように関わっています。この写真９は、先ほど園長からも少し話があったベビーマッサージをしているところです。当園では、子どもたちに愛情を伝えるツールの１つとして、ベビーマッサージを取り入れています。心が深いところで結び付いて、とても気持ちよくなるので、子どもたちも大好きです。この２人は保育士にしてもらったマッサージを覚えて、小さい子にやっている４歳児の女の子たちです。食事やお昼寝などの生活の場面では、こうした養護的な関わりが、本当にたくさん見られています。見ていると心がほっこりします。

写真 8

写真 9

小さい子も赤ちゃんのことが大好きです。ベビーベッドをお部屋の真ん中近くに配置することで、みんなが赤ちゃんのことを気に掛けます（写真 10）。手を握ったり、優しくさすったり、お互いに癒し癒される姿がよく見られています。

クラスの活動等で頑張ってきた５歳児が「ただいま」と声を掛けたり、赤ちゃんと触れ合ったりすることで、緊張から解放されるといった姿がよく見られています（写真 11）。大きい子へのあこがれと安心感が感じられるのではないかと思います。

写真 10

写真 11

写真 12

写真 12 は、5 歳児の女の子に四六時中くっつく 3 歳児の男の子です。この時の彼はとてもイヤイヤが多くて手が掛かっていたのですが、この女の子に甘えることで安心感を得ていたのだと思います。この女の子も、年長での入所でしたが、小さい子に慕われ、自分も積極的にお世話をすることで、保育園での生活に自信が持てるようになっていきました。

⑵ 多世代交流

まずは卒園生の保育参加です（写真 13）。夏休みや冬休みなどを利用して、卒園生が自主的に保育園にお手伝いに来ます。子どもたちも卒園生のことが大好きです。卒園生たちも保育園時代を思い出したように、積極的なかかわりを見せ、それによって自信を深めているのではないかと考えています。近年は「異年齢同窓会」を開催し、さらに交流の場を広げられるようにしています。

写真 13

写真 14 は、「一日ママ・パパせんせい」（保護者の保育参加）の様子です。1 日先生として、お母さん、お父さんたちが保育に入ることで、お子さんの園での様子や友だち関係、保育園への理解を深めてもらうこと目的としています。「保育園でどのように過ごしているかわかった」「保育士の大変さが分かった」「感謝している」「子どもたちが色々なことを教えてくれたり、遊んでくれたりして嬉しかった」といった感想をたくさんいただいています。

最後に、当園では父母の会があり、子どもたちのために活動してくださっています。さらにその父母の会の中にお父さんの会があり、「子どもたちの笑顔のために」というスローガンを掲げて、キャンプやさまざまなイベントを企画してくれています（写真 15）。こうした多世代の交流を通して、相互理解が深まり、子どもたちと共に育ち合うことができるのではないかと思います。

写真 14

写真 15

【参考】発寒ひかり保育園ホームページ　http://h-hikari.sakura.ne.jp/